祭のこと

泉鏡太郎

青空文庫

いまも中六番町の魚屋へ行つて歸つた、家内の話だが、其家の女房が負ぶをして居る、誕生を濟ましたばかりの嬰兒に「みいちやん、お祭は、——お祭は。」と聞くと、小指の先ほどな、小さな鼻を撮んぢやあ、莞爾々々、鼻を撮んぢやあ莞爾々々する。

山王樣のお渡りの、猿田彦命の面を覺えたのである。

それから、「お獅子は？　みいちやん。」と聞くと、引掛けて居る半纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり、取つてはかぶりしたさうである。いや、お祭は嬉しいものだ。

——今日は梅雨の雨が、朝から降つて薄ら寒い。……

潮は其の時々變るのであらうが、祭の夜は、思出しても、何年にも、いつも暗いやうに思はれる。時候が丁ど梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月ある頃でも、曇るのであらう。また、大通りの絹張の繪行燈、横町々々の紅い軒提灯も、祭禮の夜は暗の方が相應しい。月の紅提灯は納涼に成る。それから、空の冴えた萬燈は、霜のお會式を思はせる。

日中の暑さに、酒は浴びたり、血は煮える。御神輿かつぎは、人の氣競がもの凄い。五十人、八十人、百何人、ひとかたまりの若い衆の顏は、目が据り、色は血走り、脣は青く成つて、前向き、横向き、うしろ向。一つにでつちて、葡萄の房に一粒づゝ目口鼻を描いたやうで、手足の筋は凌霄花の緋を欺く。

御神輿の柱の、飾の珊瑚が※と咲き、銀の鈴が鳴据つて、鳳凰の翼、鷄のとさかが、颯と汗ばむと、彼方此方に揉む状は團扇の風、手の波に、ゆら〳〵と乗つて揺れ、すらりと大地を斜に流るゝかとすれば、千本の腕の帆柱に、衝と軒の上へまつすぐに舞上る。……

わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もう此時は、人が御神輿を擔ぐのでない。龍頭また鷁首にして、碧丹、藍紅を彩れる樓船なす御神輿の方が、います靈とともに、人の波を思ふまゝ釣るのである。

御神輿は行きたい方へ行き、めぐりたい方へめぐる。殆ど人間業ではない。

三社様の御神輿が、芳原を渡つた時であつた。仲の町で、或引手茶屋の女房の、久しく煩つて居たのが、祭の景氣に漸と起きて、微に嬉しさうに、しかし悄乎と店先にイんだ。

御神輿は、あらぬ向う側を練つて、振向きもしないで四五十間ずつと過ぎる。まく鹽も手に持つたのに、……あゝ、ながわづらひゆゑ店も寂れた、……小兒の時から私も贔屓、あちらでも御贔屓の御神輿も見棄てて行くか、と肩を落して、ほろりとしつゝ見送ると、地震が揺つて地が動き、町が此方へ傾いたやうに、わツと起る聲と齊しく、御神輿は大波を打つて、どどと打つて返して、づしんと其處の縁臺に据つた。——其の縁臺がめい込んで、地が三尺ばかり掘下つたと言ふのである。女房は即座に癒えて、軒の花が輝いた。

揃の浴衣をはじめとして、提灯の張替へをお出し置き下さい、へい、頂きに出ました。えゝ、張替をお届け申します。――軒の花を掛けます、と入かはり立ちかはる、二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それも可い。テケテンテケテン、はや獅子が舞ひあるく。

お神樂囃子、踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの、人形、いけ花。造花は、櫻、牡丹、藤、つゝじ。いけ花は、あやめ、姫百合、青楓。

こゝに、おみき所と言ふのに、三寶を供へ、樽を据ゑ、緋の毛氈に青竹の埒、高張提灯、弓張をおし重ねて、積上げたほど赤々と、暑くたつて構はない。大火鉢に火がくわん〳〵と熾つて、鐵瓶が、いゝ心持にフツ〳〵と湯氣を立てて居る。銅壺には銚子が並んで、中には泳ぐのがある。老鋪の旦那、新店の若主人、番頭どん、小僧たちも。町内の若い衆が陣取つて、將棋をさす、碁を打つ。片手づまみの大皿の鮨は、鐵砲が銃口を揃へ、めざす敵の、山葵のきいた鮪いのはとくの昔討取られて、遠慮をした海鰻の甘いのが飴のやうに少々とろけて、蛤がはがれて居る。お定りの魚軒と言ふと、だいぶ水氣立つたとよりは、汗を掻いて、角を落して、くた〳〵と成つて、つまの新蓼、青紫蘇ばかり、濃い緑、紫に、凛然と立つた處は、何うやら晝間御神輿をかついだ時の、君たちの肉の形に似て居る。……消防手御免よ。兄哥怒るな。金屏風の鶴の前に、おかめ、ひよつとこ、くりからもん〳〵の膚ぬぎ、あぐら、中には素裸で居るではないか。其處が江戸だい。お祭だ。

わつしよい、わつしよい、こらしよい、わつしよい、こらしよい、わつ

しよ〳〵。

夜が更けると、紅の星の流るゝやうに、町々の行燈、辻の萬燈、横町の提灯が、一つ消え、二つ消え、次第に暗く更くるまゝに、やゝ近き町、遠き辻に、近きは低く、遠きは高く、森あれば森に渡り、風あれば風に乘つて、小兒まじりの聲々が、

わつしよい〳〵、わつしよい〳〵、わつしよ、

わつしよ、わつしよ、——わつしよ。……

聲ある空は、ほんのりと、夢のやうな雲に灯を包んで動く。……かゝる時、眷屬たち三萬三千のお猿さんも遊ぶのらしい。

わつしよ、わつしよ、

わつしよ、わつしよ——〳〵。……

大正十二年八月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。
※表題は底本では、「祭《まつり》のこと」とルビがついています。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2011年8月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

祭のこと

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/